

ホトトギス

昭和二十七年七月二十八日運輸省特別取扱承認第百六二七号
平成二十二年七月一日発行（第四百十回巻別七号）

ホトトギス

七月号



俳句随想 〔三百四十九〕

汀子

東日本大震災はまだまだ収束出来ない大変な災害である。その中にある、大変な日々を耐えながら復興に向って努力しておられる方々に我々は何程のこともお助けすることが出来ないことに忸怩たる思いである。少しでも何か形になったお手伝いができるように、伝統俳句協会では募金をお願いすることにした。ご協力頂けると大変有難いのは十六年前の阪神淡路大震災の時の事を思い出しているのである。今、まだ余震が続いている。原発の見通しも立たないまま福島の方々も大変である。しばらくゆっくり眠りたいという方があれば、わが家の空いているゲストルームや日本間を提供するから是非お申し出て頂きたい。俳句のお仲間という固い絆で結ばれていることを忘れないで頂きたい。

自然を見つめ自然に抱かれ精一杯生きて行くために我々は俳句を作っていることをもう一度考えて見よう。百花繚乱の春、瓦礫の中に咲いた梅や桜がテレビで映った。涙がでそうである。我々は無力であるが、自然は何かを我々に告げようとしている。一人一人が自分なりに自然からのメッセージを受け止めて俳句にして行かなければならない。関東大震災でご家族を亡くされた京極紀陽さんのことが頻りに思い出される。「わが知れる阿鼻叫喚や震災忌」昭和三十三年十二月号ホ巻頭。

旬日記 汀子

平成二十二年七月三日 芦屋ホトギス会

雷の予報に向かふ離陸かな
庭椅子に日除一枚とどひあり
道をしへ一歩一歩に迷ひあり
もう紛れなき半夏生なりしかな
七月四日 下萌旬会

毛虫這ふ視線の中に加はり
すぐそこと言ひし油断の夕立かな
月見草三瓶の旅も旬日に
昨日降り今日梅雨晴となる家
誰がための闇彩りて月見草

七月五日 ロイヤル俳壇

玫瑰の刺に阻まれ庭手入
藤椅子に山荘の夜の団居あり
大勢の声の集るはたたがみ
雷過ぐる瞬時長しと短しと
軽々と運ぶ藤椅子五六人

七月八日 清交社

夜光虫波間かがよひはじめけり
一日の身長を恪勤に梅雨の晴
我も又長寿とよばれ百日紅
こぼす花結界越ゆる百日紅
片航の消え人通り失せし道
出航の消え轟きぬ夜光虫

七月九日 工業倶楽部

一枚の闇のほころぶ月見草
夕立の真つ只中に着陸す
一滴に始まる夕立なりしかな
七月十日 北海道ホトギス同人会俳句大会前日旬会

やはらかきこの虎杖も蝦夷のもの
万緑の貫く蝦夷の大地訪ふ
じり込めし小樽に父の心訪ふ
海の色消して小樽のじり深し
誰彼に逢ふも旅路よ汗涼し

邂逅は別れなりけり露涼す
汗消えて北海道に着陸す
七月十一日 北海道ホトギス俳句大会

今日ほもう別る小樽明易し
北国の白夜の旅寝浅かりし
七月十三日 大阪倶楽部

旅終へて大阪の山路となりけり
目覚よき汗の一日のはじまれる
汗ぬぐふとも涙拭く仕草とも
七月十三日 綿業倶楽部

夕立の上りたるへり旅支度
夕立のありしと迎へられしこと
七月十七日 石見ホトギス俳句大会前日旬会

さういへば祇園祭でありしこと
運転の月細し涼しき在りどころ
七月十八日 石見ホトギス俳句大会

満天の星消えし朝露涼し
蚊も刺さぬ夜更の星に包まるる
七月二十日 有恒倶楽部

満天の星と語りて露涼し
八月見草咲けば所在の新し
ハーンモック吊せばそこが風の道
夏霧の消えゆく早さ運転す

七月二十日 無名会

サングラス欠かせぬ三百五十キ口
ふたたびは訪ふこともなき深山滝
滝しづき浴びてこれより帰路となる
星見上げ北斗七星露涼し
わが顔の一部となりぬサングラス

七月二十一日 夏潮旬会

満天の季節語りし汗涼し
蟬鳴いて季節移りしこと確か
ナイターの済まねば仕事手につかず
星月夜余韻の消えぬ旅路かな
暑さすぐ忘れて庭に出て行きぬ

七月二十一日 きつらら会

水無月の旅の予定のなほ二三
梅雨明けしこと喜んであるうちに
梅雨明の太陽占めし都心かな
忘れぬし暑さとなつてぬしこと
水無月の星と語りし旅終へと
梅雨明を誘ふ山風強きこと
七月二十三日 時雨会

梅雨のこと忘れる早さありけり
花莫産の染みの記憶もなつかしく
星あまた仰ぎ来し旅汗涼し
七月二十四日 新野分会夏行

山湖には都会の暑さなかりけり
夕暮の花をつづりし宿りかな
つひに来し山湖の宿のはたがみ
七月二十五日野分会夏行第二旬会

雷雨をとりけり朝の来し山湖
冷房をとめて山湖の宿りかな
夕立の見えるはガラス音へだて
靄立ちて今日の山湖の暑さはや
玻璃越しに見てゐる限り暑さなく

野分会夏行 第三旬会

よべ暴れたりしいかづちなき目覚
夕立の音まで見えてをりにけり
稿債の待つ家路とは暑かりし
七月二十八日 甲南俳句会

湖に翳落しははじめし夕立雲
盛夏とて家居心のあるがまま
なつかしき汗の消息聞き年ら
学舎に歴史を刻み来し盛夏
ふりかへる歳月ありて夏休

七月三十一日 東海ホトギス俳句大会前日旬会

夏霧に消されし辺り伊吹山
一雨にしのぐ暑さのあることを
汗拭いてたちまち心立て直す
炎天の犬山城の見えしより
日盛を忘れて車降り立ちぬ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十一年七月一日 蕉心会

水無月の万物動き違ふ草の色
箱庭の万物動き初む氣配
地下を出てよりハンカチの離されず
下町の足音晩夏近づけて
梅雨傘を買った途端に晴れてきた
箱庭を天地として動くも
その中にコロナビールを置く茶店
彦様に頂いたこの扇子どや
山梔子を供花に汝の席出来上る
慈雨といふ言の葉重し半夏生

七月三四日 あつたう句会

歳時記を眺むあなたさくらの涼し
甲斐の日に仕上げられたるさくらんぼ
甘さとは届かぬ高ささくらんぼ
万緑の底に吸ひ込まれし事故車
五月雨に明かされてゆく湖の色
七月七日 WEIP俳句通信「出句

梅雨雲に城は小さく竹めり
平城といふ涼しさに磴上る
夏霞霽れゆく先の湖の藍
五月晴信玄の世を語るかに
夏菊の溢れて曾良の墓小さし
紫陽花の白に落着く寺苑かな
道迷ふことも涼しき湖畔かな
梅雨雲に甲斐の山々落着かず
水無月の濠の騒ぎでありけり
石垣の苔に難渋天道虫
万緑の湖に桂は城の要とも
籐椅子の湖に向けられたる口ピ
青田抜け湖といふ静けさ
七変化寺の哀史の色は秘
俳聖を偲ぶ本堂灯涼し
梅心蝶を天守は重くのしかかり
忌垣に蛇遊ばせて城の黙

橋涼し湖見える辺りより
日焼止めクリームそつと旅の荷に
もへつ毛虫高きを指しけり
香水の子に池広からず狭からず
七月十一日 北海道ホトギス同人会、大会
夏霧やシャコタンブルー見し日はも
飛機降りよりビール欲る六腑かな
飛鳥も来し街は涼しく開けたる
東京は嘘と言ひたき涼しさに
人寄せて蚊を寄せて句碑鎮もれり
冷房にまるごと涼しき涙かな
除幕の日語と涼しき涙かな
七月十二日 朝日カルチャー若草句会
滝壺へ落ちれば水となる分子
胡瓜食む音に震撼する漢
胡瓜の怪を集めて滝となりけり
僕胡瓜実集めて曲つてゐたいの
七月十三日 新廣会スターリング
冷房の中の蔓下閣の一部分
梅雨雲に川音弾き返されし幅
辛燕人を恐れぬ飛翔かな
辛居めく世界遺産の軒下
端里祭や鵜飼の余韻持ち寄り
鵜舟待つ心君待つ心はも
通し鴨自分鵜と思つてをりけり
疲鶴に水の怒つてをりけり
七月十五日 登高会
大夕立愚陀仏庵を持ち去りぬ
大夕立スカイツリを歪ませて
ビル街といふ夕立を呼ぶ高き
七月十六日 浜田吟行会
老鶯の羽弾いて城の黙
老鶯に好かれぬ人嫌は城の人
蟬鳴に聞かぬ声めく城址かな
老鶯や城の昔を語るかに

七月八日 土筆会

旅続く果ての山陰道涼し
合飲の花ロードと名付たき三瓶
星の夜を誘へる如雪加鳴く
黒が先づ句碑に近づくと日傘かな
旋律は変口長調閑古鳥
七月十日 草木風会
浴衣着て温泉街の灯に消ゆる
西に北に炎天続く旅続く
浴衣着て夜を近づけてをりにけり
古浴衣父の遺せし染みかま
夕菅や夕暮れ夕日をさめし
榛名富士涼しく夕日をさめし
かなかなに榛名稜線緩びけり
老鶯に明け渡したる湖の黙
迫り来るまでの静寂雲の峰
星の空洗ひ上げたる大夕立
初参加迎へ四十人涼し
納の傷土産としたる下山かな
水面をひつくり返しボートかな
披講子は涼しき佳人ばかりかな
七月十七日 若水句会
浜風にナイターの灯の点り初む
ナイターの灯に縦縞の燃えてをり
夏瘦をしても佳人は佳人なる
ナイターや六甲おろし聞くまでは
首位に立つ阪神ナイトゲームかな
海の日や嗚呼長門陸奥伊勢日向
ナイターや黒と黄色が宙を舞ふ
七月二十日 カトリック新聞選者吟
絵硝子のマリヤ輝く大西日
天上の句座に涼しき夫婦かな
七月二十一日 樟 桑田水子様
殿様を偲ぶ涼しき旅として
泳ぎたくなる川幅でありけり
落し文正俊さんの便りとも

旅続く果ての山陰道涼し
合飲の花ロードと名付たき三瓶
星の夜を誘へる如雪加鳴く
黒が先づ句碑に近づくと日傘かな
旋律は変口長調閑古鳥
七月十日 草木風会
浴衣着て温泉街の灯に消ゆる
西に北に炎天続く旅続く
浴衣着て夜を近づけてをりにけり
古浴衣父の遺せし染みかま
夕菅や夕暮れ夕日をさめし
榛名富士涼しく夕日をさめし
かなかなに榛名稜線緩びけり
老鶯に明け渡したる湖の黙
迫り来るまでの静寂雲の峰
星の空洗ひ上げたる大夕立
初参加迎へ四十人涼し
納の傷土産としたる下山かな
水面をひつくり返しボートかな
披講子は涼しき佳人ばかりかな
七月十七日 若水句会
浜風にナイターの灯の点り初む
ナイターの灯に縦縞の燃えてをり
夏瘦をしても佳人は佳人なる
ナイターや六甲おろし聞くまでは
首位に立つ阪神ナイトゲームかな
海の日や嗚呼長門陸奥伊勢日向
ナイターや黒と黄色が宙を舞ふ
七月二十日 カトリック新聞選者吟
絵硝子のマリヤ輝く大西日
天上の句座に涼しき夫婦かな
七月二十一日 樟 桑田水子様
殿様を偲ぶ涼しき旅として
泳ぎたくなる川幅でありけり
落し文正俊さんの便りとも

雑詠

廣太郎 選

淡雪の一しきり舞ひふとゆるみ 東京 今井千鶴子
 春と手をつないで歩く女の子 同
 会ふたびにきれいになりて卒業す 同
 双六の花の都へあと少し 相模原 木村享史
 その内といふ約束も春隣 同
 追伸に逢ひたしとあり春近し 同
 西行忌吉野を思ふ日なりけり 樺原 稲岡 長
 千年を耕して来て津波また 同
 春の土見るさへむごき津波来し 同
 春近きこと土に問ひ空へ問ひ 龍ヶ崎 今橋眞理子
 まんさくの枝先ふいに花となる 同
 リビングのどこかざらりと春一番 同
 振袖は母のお下り上巳の日 神戸 千原叡子
 日一日知恵のつく児と雛の宵 同
 雛箱を納む蔵の扉開け放ち 同
 何するでなく大年に寝転がり 静岡 須藤常央
 酔ひ潰れたるは去年とも今年とも 同
 初夢の句座に高浜虚子と居り 同

寒鯉のごとくにものを考へる 熊本 岩岡中正
 春はまだ海底にある寒さかな 同
 鶯鳴いて春まだ頼りなかりけり 同
 江戸前の水を脱ぎ捨て帰る鴨 東京 橋本くに彦
 帰るかど決めかねてゐる鴨一羽 同
 東京の雪にとまどふハイヒール 同
 鴨引きぬ大阪城の陣を解き 奈良 古賀しづれ
 一城の天より地より囀れり 同
 大阪を半分落し大霞 同
 霜柱てふ力学の立ち上る 福山 竹下陶子
 霜柱崩れ大地に声起る 同
 風花の平家の秘話を飛ばしをり 同
 元日を白波立てて吉野川 徳島 上崎暮潮
 徳島市従へ眉山寒に入る 同
 冬晴や門を貫く石畳 同
 浅春やうすくれなゐの葉書買ふ 神戸 山田佳乃
 還暦のツカジェンヌ来て鬼やらひ 同
 広縁に偲ぶ春帽子 同
 まづ広く野に置く布石いぬふぐり 香川 湯川 雅
 一茎の蒲公英に一帶日向 同
 出揃ひて決まる間隔名草の芽 同
 旧正や江戸よりつづく時の鐘 東京 大久保白村
 旧正のしきたり守り里に老い 同
 旧正や大江戸線に待合せ 同

雑詠句評（六月号より）

住み馴れし京あがりてふ絵双六 京都 安原 葉

純也・暮潮・佳乃
しげ人・昭代・比奈夫
雅・くに彦・一步
仁義・廣太郎

寒菊を助け震災の忌を修す 芦屋 小田ひろ

一月十七日、阪神淡路大震災の犠牲者を弔んで、寒菊を供えたのである。作者はお身内を亡くされたとか仄聞している。寒菊に託された、尽きることのない深い悲しみが伝わってくる。（純也）
作者は、平成七年一月十七日に起こった阪神淡路大震災で御身内を亡くされた。毎年この日が来ると、悲しみも新たに思い出されるのである。季節のしみじみとした美しさが悲しみを誘う。そして平成二十三年三月十一日にも東日本大震災が起こってしまったのである。偶然とはいえ余りにも悲しい。（廣太郎）

絵双六すなわち道中双六。子供のときよく遊んだが、今は見ることもない。しかし、記憶は鮮明に残っている。句意極めて明瞭で簡潔に表現されているところがいい。のみならず、「住み馴れて」で、作者の在は新潟県長岡市でありながら、浄土真宗門の要職として京都に住むことが多い日常と、その京都に対する愛着を言っていると同時によく考えてみると、故郷長岡への郷愁もひそんでいるように思われるのは作者を知っているせいのみではあるまい。そのあたりまことに巧みと言わざるを得ない。（暮潮）

作者の御実家は別の場所であるが、長年京都に住んでおられるのである。多忙を極めるお仕事に就いておられるが、それだけ長く住んでおられると、正に「住めば都」だろう。そんな時、双六に興じられたか、御覧になったか。季節から、何ともいえない臨場感が伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

江子選

送られし御水の今は京辺り
人知れず咲くかたかごの群るる谷
ビル街に居て初景色とは孤独
あをさ汁人は海から生れしてふ
耕のはかどつてゐるとも見えず
通り雨気にもかけずに耕せる
励ましのごとく雪嶺ありにけり
水音に囲まれてゐて春隣
一系の天子の匂あり鳴雪忌
落ちてよりひととき白き椿かな
渡り石歩せば鳴き寄る鴨なりし
石仏に夜べの雪解け賽光る
輓の津の日東一の良夜かな
高原のむらさき匂ふ実紫
遠き子のひひなの命あづかれる
水温むわが身とろりと重きかな
さりげなくマフラー巻いて待ちくれし
うつかりと踏みし寺苑の路のたう

京都 安原 葉
同 稲畑廣太郎
東京 三村純也
熊本 岩岡中正
東京 今井千鶴子
同
千葉 大木さつき
同
福山 竹下陶子
同
神戸 長山あや
同
たつの 浅井青陽子
同

山雨晴れば花は明るさと戻す
見上げれば花の天蓋透けて空
野の果は天の入口揚雲雀
野の広さは思へぬ深紅寒牡丹
古木とは思へぬ深紅寒牡丹
ものぐさとなつてゐるなり春の風邪
梅一輪春秋庭にはじまりぬ
早春の野を跳べる子よ走る子よ
眠り草ねむらせ過ぎてつまらなき
足腰の覚めてはをらず昼寝覚
被災地へ雛と共に祈ること
草萌ゆる大地夢みて復興へ
もう母の十七回忌日脚伸ぶ
高階のどの部屋からも日脚伸ぶ
人は入れぬ花かたかごの深ひとつ
かたかごの風紫や地を這へり
海蹴つて出でし初日を胸の前
予定表消して加へて春近し

榎原 稲岡 長
同 奈良 古賀しぐれ
吹田 宮崎 正
同
箕面 井上浩一郎
同
神戸 小田三千代
同
宝塚 水田むつみ
同
徳島 上崎暮潮
同
東京 河野美奇
同
相模原 木村享史
同

天地有情句評

汀子

厳しさの受け取り方。

落ちてよりひととき白き椿かな 東京 今井千鶴子

汚れやすい白椿の瞬時。

渡り石歩せば鳴き寄る鴨なりし 千葉 大木さつき

一歩ずつ近寄る情。

高原のむらさき匂ふ実紫 福山 竹下陶子

澄んだ高原の空気に澄んだ紫。

遠き子のひひなの命あづかれる 神戸 長山あや

雛を通して情を通わす母と娘。(以下略)

いよいよ始まる御水取の行事。

送られし御水の今は京辺り 京都 安原 葉

ビル街に居て初景色とは孤独 東京 稲畑廣太郎

大都会の新年。

耕のはかどつてみるとも見えず 神戸 三村純也

絵画的見方。

励ましのごとく雪嶺ありにけり 熊本 岩岡中正